

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：34417

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10920

研究課題名（和文）卵巣がんが疑われる患者に対する術前外来ケアプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a preoperative outpatient care program for patients with suspected ovarian cancer

研究代表者

松井 利江（Matsui, Rie）

関西医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：30635090

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文献検討及び、卵巣がん体験者および外来看護師に対する質的調査の結果から、卵巣がんが疑われる段階の患者に必要な外来での看護ケアを明らかにした。文献検討と卵巣がん体験者の調査からは、卵巣がんかもしれない不確かな状況で、可能な限りの見通しを立てられるような関わりや、治療後の変化を予測したセクシュアリティへの支援を組み込むことの必要性が示唆された。また、外来看護師に対する調査では、ケアの優先度が高い患者の抽出やニーズの把握、他部門の専門家との協働の重要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義として、以下の3点が挙げられる。1）これまで明らかにされてこなかった術前の卵巣がん患者に対する看護ケアを明らかにできたこと、2）卵巣がんが疑われる患者に対して術前からのセクシュアリティの支援が不可欠であることを明確にできたこと、3）これまで明らかにされてこなかった卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変化を明らかにできたこと、4）卵巣がんに対する知識不足が世界的な課題に対し、卵巣がんに焦点を当てた本研究結果が貢献できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：This study identified the outpatient nursing care needed for patients with suspected ovarian cancer based on the results of a literature review and a qualitative survey of ovarian cancer survivors and outpatient nurses. The literature review and survey of ovarian cancer survivors suggested the need for a relationship that provides the best perspective amidst the uncertainty of an ovarian cancer diagnosis and incorporates support for sexuality in anticipation of post-treatment changes. Furthermore, a survey of outpatient nurses indicated the importance of identifying patients with high priorities for care, assessing patient needs, and collaborating with professionals in other departments.

研究分野：臨床看護

キーワード：卵巣がん 外来看護 術前看護 看護ケアプログラム セクシュアリティ 協働

1. 研究開始当初の背景

卵巣がんの初期は無症状であり、4割程度が進行がんで診断される¹⁾ことは、国内外の大きな関心事である。卵巣がんは、術前の組織生検が不可能なうえ、良性と悪性の中間に位置する境界悪性腫瘍が存在するため、術前診断が難しい。また、卵巣がんの標準治療は、子宮や卵巣およびその周囲組織の切除術であり、女性のライフサイクルに直結する問題を引き起こす特徴がある。手術以外の確定診断がない現状では、医師が患者に行う術前説明は、曖昧にならざるを得ず、患者は極めて不確かな状況で手術に臨むことになる。

術前に卵巣がんの「疑い」があると告げられた患者の多くは、卵巣がんの予後の悪さから死を意識して怯え^{2,3)}、化学療法の副作用への不安⁴⁾や妊孕性喪失への懸念⁵⁾など様々な苦悩を抱えている。その一方で、手術やその後に計画されるかもしれない化学療法に向けて、家庭内の役割調整や、周囲の人や医療者との関係の強化・構築、栄養補給など、今後の成り行きを想定し、自分なりに必要だと思ふ準備に取り組んでいる者もいる⁴⁾。このように、卵巣がんは、術前に手術以降の治療方針が明確にされないために、病状に対する認識や準備内容は患者個々によってかなりの違いがあると推測される。

したがって、手術待機の期間には、患者の心理状況に配慮しながらも、個々の状況に応じた治療に向けた心身の準備を支援することが重要である。

以上より、卵巣がんが疑われる患者に対する治療開始前、すなわち術前の外来における看護プログラムが開発できれば、手術待機期間の患者のニーズが充足されると共に、治療に向けた準備を促進できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は「卵巣がんを疑われる患者を対象に、治療準備を促進する外来看護ケアプログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

研究構想時の文献検討から、術前の身体的・心理的・社会的支援の内容と必要性はある程度明確になっていた。しかし、セクシュアリティに関する支援は著しく不足していた。研究者間で検討した結果、卵巣がんという女性特有の疾患であるからこそ、セクシュアリティを軸にしたケアを開発する必要性があると考えた。そこで、卵巣がん患者のセクシュアリティの変化についての文献検討と質的調査を実施したのちに、ケアプログラムを検討することにした。

(1) 文献検討 (研究1)

卵巣がん女性のセクシュアリティに関して国内外の文献検討を行い、卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの特徴や影響要因を明らかにした。

(2) 卵巣がん体験者を対象とした質的調査 (研究2)

卵巣がん体験者を対象に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ⁶⁾の手法を用いて分析した。調査では、術前から術後の長期的な経過において、セクシュアリティがどのように変化するのかを明らかにし、術前に必要な看護ケアを検討した。

(3) 外来看護師を対象とした質的調査 (研究3)

卵巣がん患者のケアに精通した熟練看護師によるグループインタビューを行った。グループインタビューでは、看護師らが実践している術前ケアの実際と課題について意見を求めた。

(4) 結果の統合

上記(1)(2)(3)の結果を統合し、卵巣がんが疑われる患者に対する、効果的な術前の外来看護ケアを検討した。

4. 研究成果

(1) 研究1の成果：文献検討⁷⁾

卵巣がん患者のセクシュアリティに関する国内外の文献を検索した結果、31件(すべて海外論文)が対象となった。この文献レビューでは、研究内容は「性機能障害の実態と影響要因」「性行為の実態と影響要因」「パートナーとの関係性と影響要因」「性的魅力・ボディイメージの変化と影響要因」に分類された。個人差はあるものの、これらのようなセクシュアリティの変化は生殖年齢であるか否かに関わらず、どの患者

にも少なからず起こりうるということが明らかとなった。そして、卵巣がんの予後に対する認識や不安、ひいてはパートナーとの閉鎖的なコミュニケーションが関与していることが示唆された。この結果から、ケアの対象者を広く捉え、セクシュアリティの概念に基づいた包括的かつ継続的な支援が必要だと分かった。ただし、本結果は主に欧米諸国から得られたもので、文化や価値の異なる日本人に対するケアを検討するには限界がある。

(2) 研究2の成果：卵巣がん体験者を対象とした質的調査⁸⁾

患者会に参加する、あるいは患者会代表者から紹介された卵巣がん体験者18名に対し、原則として2回の面接調査を行った。面接は、研究1の結果を参考に作成したインタビューガイドを用いた。分析の結果、卵巣がん女性におけるセクシュアリティの変容を包括する5つのカテゴリーと13のサブカテゴリーが明らかになった。これらのカテゴリーには、卵巣と子宮を失う現実と直面する、女性であることの可逆性と不可逆性を熟考する、性行為に対する気持ちの変化と否定的な感情に向き合う、パートナーシップの本質を再評価する、女性としてのアイデンティティに満足感を見出す、が含まれた。治療による精神的・身体的変化を乗り越え、パートナーとの相互作用により、女性たちは次第に自分自身と女性らしさを肯定的にとらえられるようになった。この結果から、術前に必要なケアとして、自身の病状の認識、卵巣がんに関する知識の程度を把握し、原則としてすべての女性に、セクシュアリティがどのように変化しうるかを説明し、ニーズに応じた情報を提供することが必要である。また、治療後の就労継続は女性である自分をありのままに認め、自尊感情を維持するうえで重要であることから、術前から就労継続を前提とした支援も求められる。

(3) 研究3の成果：外来看護師を対象とした質的調査

3か所のがん診断連携拠点病院5名が参加したグループインタビューでは、【患者の心情に配慮しながら、卵巣がん患者と共に生きる場合の道筋を与える】【医師やスペシャリストと連携し、妊孕性温存の厳しさに対峙できるように支える】【今後の生活が困難になりうる要因を捉え、術前から継続支援を開始する】といった実践が明らかになった。外来看護師は、限られた時間の中で、今後の卵巣がん治療がその患者の生活に及ぼす影響を長期的な視点でアセスメントし、情報を吟味して提供するほか、継続的なケアの土台作りにも努めている。課題を解決するためには、看護師個人の努力だけでは難しく、外来看護体制の整備が必要と分かった。

(4) (1)(2)(3)の結果の統合

本研究期間では、介入プログラムの要素となる、指針として以下のケアを検討した。また、これらは他部署（外来診療科・がん相談支援センター・入院支援部門など）の看護師や、多職種との協働によって可能になることが示された。

表1. 卵巣がんが疑われる患者に対する術前外来における看護ケア

看護ケア	内容
スクリーニング 介入が必要な患者の抽出	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢（生殖可能年齢）、閉経前 ・挙児希望、未婚者、シングルマザー ・不安や恐怖心が顕著に強い ・経済的困窮 ・不妊治療経験者
アセスメント 卵巣がんに対する認識や知識、セクシュアリティを含む有害事象の予測	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の病状に対する認識 ・卵巣がん・卵巣がん治療に対する知識・認識 ・治療の有害事象に対する知識・認識（骨髄抑制や食欲不振、悪心嘔吐、倦怠感など頻度が高いものに加え、リンパ浮腫、性機能障害などについて） ・治療に対する期待・希望 ・パートナーの有無、関係性・コミュニケーションのパターン、セックスの有無や頻度・重要性 ・生活の上で価値を置いていること ・就労状況、治療後の終了の予定・希望
情報提供・相談 卵巣がんの可能性を前提とし、患者と家族のニーズに基づく。内容に応じて専門家に繋ぐ *患者の心理状態に応じて	<ul style="list-style-type: none"> ・卵巣がんと診断された場合の治療の経過 ・治療をしながらの生活についてのイメージがもてるように情報提供する ・妊孕性温存の可能性 ・遺伝性腫瘍の可能性

<p>心理的な支援 希望をもって治療に臨むための 支援</p>	<p>・患者の希望を捉え、共に願う ・患者の希望になる正しい情報(統計的な根拠) を提供する</p>
-----------------------------------------	------------------------------------------------------------

本研究は、卵巣がんが疑われる患者に対する適切な外来での支援について検討し、プログラムの要素を特定するにとどまった。本結果を看護プログラムとして実現するためには、医療機関によって異なる外来の体制や専門家の有無など、多様な問題を含めて検討していく必要がある。

文献

1. 日本産婦人科腫瘍学会編. (2020). 第2章卵巣癌・卵管癌・腹膜癌. 卵巣がん・卵管癌・腹膜癌治療ガイドライン 2020. 金原出版.
2. 新井敦美, 塚越徳子, 堀越政孝, 中西陽子, & 二渡玉江. (2015). 診断が不確定なまま手術を受ける卵巣がん患者の苦痛と対処. 群馬保健学紀要, 35, 81-92. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/2015173252>
3. Guenther, J., Stiles, A., & Champion, J. D. (2012). The lived experience of ovarian cancer: a phenomenological approach. *Journal of the American Academy of Nurse Practitioners*, 24(10), 595-603. <https://doi.org/10.1111/j.1745-7599.2012.00732.x>
4. Seibaek, L., Petersen, L. K., Blaakaer, J., & Hounsgaard, L. (2012). Hoping for the best, preparing for the worst: the lived experiences of women undergoing ovarian cancer surgery. *European Journal of Cancer Care (English Language Edition)*, 21(3), 360-371. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2354.2011.01313.x>
5. Cesario, S. K., Nelson, L. S., Broxson, A., & Cesario, A. L. (2010). Sword of Damocles cutting through the life stages of women with ovarian cancer. *Oncology Nursing Forum*, 37(5), 609-617. <https://doi.org/10.1188/10.Onf.609-617>
6. 木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 : 質的研究への誘い. 弘文堂. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA63066266>
7. 松井利江, & 瀬戸奈津子. (2021). 卵巣がん患者のセクシュアリティに関する研究の動向と今後の課題. *Palliative Care Research*, 16(1), 3-12. <http://search.jamas.or.jp/link/ui/2021236160>
8. Matsui, R., Aoki, S., & Seto, N. (2024). A qualitative analysis of sexual transformation in Japanese women after ovarian cancer treatment. *Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing*, 11(4), 100381. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.apjon.2024.100381>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松井利江, 瀬戸奈津子	4. 巻 16
2. 論文標題 卵巣がん患者のセクシュアリティに関する研究の動向と今後の課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Palliative Care Research	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2512/jspm.16.3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Matsui Rie, Aoki Sanae, Seto Natsuko	4. 巻 11
2. 論文標題 A qualitative analysis of sexual transformation in Japanese women after ovarian cancer treatment	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Asia-Pacific Journal of Oncology Nursing	6. 最初と最後の頁 100381 ~ 100381
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.apjon.2024.100381	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松井利江 青木早苗 瀬戸奈津子
2. 発表標題 卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容プロセス
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松井利江 青木早苗 瀬戸奈津子
2. 発表標題 卵巣がんが疑われる患者に対する外来看護師の実践と課題
3. 学会等名 第38回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	瀬戸 奈津子 (Seto Natsuko) (60512069)	関西医科大学・看護学部・教授 (34417)	
研究 分担者	青木 早苗 (Aoki Sanae) (40516168)	関西医科大学・看護学部・教授 (34417)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------